

西南学院大学の思い出と想い

川上 宏二郎

今日は、まもなく西南学院創立100周年というこの時期にあたり、その歴史を知ること大事だということで、事務局職員夏期修養会というこのような貴重な場でお話する機会を与えていただいたことに感謝しています。

私の西南の思い出の最たるものは昭和40年代の学園紛争です。特に“学費値上げ反対運動”あるいは“闘争”をめぐるものです。

どうしてそんなに思い出として私の中にあるかというと、私が西南に来たのは1967年ですが、その前は久留米大学に勤めておりました。そこで、1966年に当時の古賀武夫学長が私のところに來られて、「今度西南が法学部を作るので、一緒に勉強しませんか」というお誘いを受けました。そうすると私の専門は法律ですから、自分の専門の学部に行くのは願ったり叶ったりということで、お話を受けさせていただいたわけです。私が行く前に西南学院大学では、法学部増設反対運動というものがありました。他の大学では新聞でよく見ましたが、まさか自分が今から行く大学で学生が反対していることは露ほども思っていませんでした。

ここに「学長会見もの別れ—西南大 学生90人すわり込み」という新聞記事が出ていますが①、これは学生が廊下に座り込んで古賀学長を捉まえて学部増設反対運動などを要求している写真です。法学部を作ることが、学生にとってはマスプロ教育をもっと増大していくと思われていたわけです。マスプロ教育とは、皆さん



△大学紛争の思い出を語る川上氏



①1966(S41).9.17 フクニチ新聞

ご存知のようにマスプロダクションの意味で、多くの学生を狭い講義室に詰め込んで、お金ばかりとって学生をあまり大事に扱わないという意味ですが、法学部を作る事はまたマスプロ教育に輪をかけることになるのではないかとということで法学部増設反対運動が起きました。この当時は、90名近い学生が反対運動の盛り込みを行ったというのは大きな事件でしたので、このようにニュースになったんだらうと思います。

そして、古賀学長は学生に対して、『再び学生諸君へー 法学部設置およびいわゆる教育のマスプロ化問題について』という冊子を配りました。これは1966年11月2日ですから先ほどの盛り込みがあった2ヵ月後になります。この中で学長の構想として「西南はこの法学部の増設をもって、文科系総合大学を完成させる」という一応の大枠は決めるということが書かれています。完成というのはそれで終わりという意味ではなく、つまり、古賀学長の頭の中には、「西南は、いまさら理系のようなお金のかかる学部を作ってもしょうがない。ここで文科系の充実した総合大学として、法学部を作ることによって全体の枠組みを作ろう」というのが将来構想だったようです。ところがこのような古賀学長の文章を読んできると、基本方針で、新年度の1967年度の授業料値上げなどはしないということが一行書いてあるんですね。これがその後どういうふうに響いたかは知りません。ただ、そういうことも学長が学内に配った冊子の中にあったというのは事実です。翌年、1968年の1月に冬季休暇が終わってから学生がだんだん集まってくると、また反対運動に熱が入ってきました。特にこれに輪をかけたのは、ちょうどアメリカの原子力空母エンタープライズという航空母艦が佐世保に寄港するというニュースが流れたために、内なる学費値上げと、外なる政治闘争が合流する形で、何か学内にも「これは大変な事になるんじゃないか」というような空気が流れました。その時、大学側は、あまり多くの学生による運動が起こると学内の混乱が予想されるということで、1月13日に学長と学生部長の名前で「夕方6時以降の課外活動は禁ずる」という掲示を出しました。つまり、学生が遅くまで残っているということが、運動にさらに拍車をかける要因になるという意味だったんでしょうか。そういう掲示が出たために、特に自治会を中心とする執行委員会が憤慨して、学生部長室を占拠しました。

学生部長室を占拠、そして全学ストへ

そして、これは貴重な写真です②。この船越栄一先生が古賀学長の後を継いで学長になられますが、この当時は法学部長でした。船越先生を中心に学生部長室を占拠しているところに行くと、「何が不満でそんなことをしているのか」ということで説得

しました。この写真には懐かしい方がおられまして、今私が指しているのが中村保三事務局長ですね。それからこの方が山崎勇視先生です。マイクを持っているのが船越先生で、その手前にいるのが私です（笑い）。これが田中輝雄先生じゃないかと思えます。結局、どうして学生たちが占拠しているのかというと、「学費値上げ絶対反対。それについて話し合いを要求する。我々は要求を通すために最後までがんばるんだ」と。しかも最後に「エンタープライズ寄港の反対の抗議声明を出せ」ととんでもない要求をしてきました。この事件が1月15日の新聞に載って、徐々に学費値上げ反対闘争が熱を帯びてきます。大学側が「白紙撤回なんかは応じられない」と頑として拒否したので、執行委員会の学生の方は自分たちだけではらちがあかないというので学生



②1968(S43). 1. 15

活動家学生が占拠した学生部長室前で説得する教職員

大会を開きます。学生大会の会場は、ランキン・チャペル¹で、学生はスト権確立のために投票をしました。ところが大学側は、「そのような学生大会は正式のルールにのっとったものではない、従ってそのような学生大会での決議は無効と認められない」ということになって、いよいよ学生と我々大学側との間に激しい対立が生じました。今、スクリーンに出ているのが1月19日の学生大会の様子です③。「1.20全学ストを実現しよう」



③1968(S43). 1. 19 学費値上げに反対する学生大会

1 1954年に竣工。当時、チャペルアワーのほか、学内外のイベントなどに利用されたが、老朽化のため2006年に取り壊された。

「学費値上げ白紙撤回」「原子力空母寄港絶対反対」この三つの要求が主でしたが、我々にとっては学費値上げ反対というのが一番大きかったです。この学生大会でもまた、大学側が認めないと言ったので投票をやりなおしたりしまして、学生大会だけが繰り返されています。この学生大会が19日、それが20日、21日となってくると、1月31日から期末試験が始まるので大学側はだんだん焦ってきます。というのは、学生側は絶対反対ということで、あちこちバリケードを作ったり、大学の授業に対して

阻止運動をしてきました。そして期末試験を実施するかどうかということで、28日について全学ストに入りました。「全学ストに突入 構内にバリケード」という記事が出ていますが④、ここにも皆さんにとって懐かしい顔があるんじゃないかと思います。



④1968(S43).1.28 西日本新聞

期末試験延期

この全学ストに突入した結果、大学側が「これ以上の混乱は避けたい」と思ったのかは分かりませんが、試験に入る前の30日に、全闘委²の学生が、もし「白紙撤回をするならば、話し合いに応じないではない」というような声明を出しました。それに大学側も合意して、強硬姿勢から初めて柔軟な態度を見せます。「今度の値上げについては学生諸君との話し合いが十分でなかった事は反省する」ということですね。つまりバリケードで期末試験ができないというのが、大学側にとってはのどに骨が刺さったように一番きつことでした。ですからバリケードを解いて期末試験を実施できれば、これからは話し合ってもいいと方向転換をしたんだと思います。しかし、大学側の譲歩する時間が間に合わず試験は延期になりました。そのことを報じた記事です⑤。ところが双方の話し合いの中で、「学生と教員が協力してバリケードを排除しよう」というような協力的な学生が出て来るようになりました。つまり自分たちは、自治会を中心とする一部の学生の激しさにはついていけないと。やっぱり私学は財政がきちんとしていないと何もできないのだから、値上げはしてほしくないが、健全な

2 全学学費値上げ反対闘争委員会のことで、学生自治会の執行委員が主なメンバーとなる。

運営のためにはやむを得ず認めざるを得ないのではないかと、そういう考えを持った学生たちもこの頃から少しずつ出て、学生側は反対派と賛成派の2つの意見に分かれてきます。結局、試験の初日に実施する分は延期になりました。

そして最終的に大学側が値上げを撤回したため、2月1日に学生側は自主的にバリケードを撤去しました。その翌日に「西南大の学費値上げ撤回」、「混乱の中、学校が譲歩—学生同士の衝突も恐れて」という見出しにあるように⑥、反対派と賛成派との間にいざこざが起こってきたというようなことがありました。この時に、大学側は3つの具体案について提示しました。1つは大学の最終決定権は理事会にあるというのを認めさせました。これがやはり一番大事なところで、学生側と値上げの話し合いをすと言っても経営権まで渡せないということです。それから2つ目は学生側が意味する白紙撤回要求を受け入れるということです。3つ目は、白紙撤回をした後、改めて学生の正規の代表者と協議会を開こう

ということです。この辺はやはり大学側も粘り腰ですね。撤回という言葉は使ってもかまわないが、それは値上げをあきらめるという意味じゃなくて、改めて正規に選ばれた学生代表と協議するという考えがあったわけです。これで少なくとも2月1日の時点で決着がつき、2日から試験が行われました。

そして日にちは戻りますが、1月27日、ちょうど学生側がバリケードを作って反対運動をした時に、学文会主催の授業料値上げ説明会に当時のE.B. ドージャー院長も出席していたのです。その時、学生側から院長に対して「西南の建学の精神は何か」という問いかけがありました。これについては、院長の肉声が貴重なテープとして残っていましたので、E.B. ドージャー院長が紛争のさなかに西南学院の建学の精神というのをどういうふうに語っているか、それを聴いてみたいと思います。



⑤1968(S43). 1. 31 西日本新聞



⑥1968(S43). 2. 2 西日本新聞

「…『キリストに忠実になりなさい』と私の父が学院に呼びかけたものは、よく同窓生の方も、あるいは学生も軽く言われる傾向があって、私の父がそれをもし聞くことができたならば嘆くだろうと思う面がございます。これを自分の身に転じて、キリストは何を思っているかということのを常に考えています。この言葉が私にどういうふう呼びかけているかを考え、そして私だけでなく皆さんも考える必要があると思うのです。私は互いにそういうふうに生きたいと願っております。そして本当にこの学院を育成するために何が一番よろしいのであるか、自分というものの利益だけを考えることのないように、私、院長であるものも考えなければならない、反省しなければならない、理事会の方も反省すべきであると思います。ただ自分たちがよければいいということではいけない。同時に相手の方々のことも考えて、互いに助け合っていくこと、互いに話し合うことは今のような皆様の要望でもよく分かるのであります。そういう意味において私どもはこのような話し合いをしている一面はありますが、どうか西南を活かすような建設的な方向で話し合っていくことのできるような雰囲気の中にありたいと願ってやまない次第であります。…」

(1968年1月27日：「授業料値上げ説明会」の録音より)

創立者である C.K. ドージャーの遺志を受け継いで長男 E.B. ドージャー先生が院長になっておられた。この時が60歳前後だったでしょうか、心臓の持病があったりして、本当に耐え難い苦勞をされただろうと思います。その中で「キリストに忠実でありなさいと言っている意味を最近の人は少し軽く考えている」というのが、まず不満が出るんですね。どういう意味で軽く考えているかというのは言ってないのですが、要するにキリスト教の考えを人格的なものと我々は受けて、もし今キリストがいたらどういうことをしたでしょうか、それをみんなで考えましようと言っておられるんです。自分も院長として考える、理事の人も考える、しかし君たち学生も他人ごとではないですよ。そう考えればどっちの立場が絶対に正しいというのではなくて、その話し合いの中からお互いに協力できるのではないかと、というのが私の解釈です。対立ではなくて「話し合いを」と説かれている。E.B. ドージャー院長の言う建学の精神が、そこにあるということを言われているのではないかと思います。

E. B. ドージャー院長軟禁

このように学費値上げを撤回した後どうしたかという、大学側は値上げをあきらめたわけではないので、学生側は2月10日までに協議会委員を選んで大学側に提出してくるという前提で学生側と話し合いに入ろうとしました。ところが学生側はなかなか一枚岩ではなかったため、内部でまとまりませんでした。最終的には体育会、学文会、それから応援指導部などいろいろなクラブ活動の主なメンバーなどを委員に選んできました。結局、協議会の結論は、授業料2万円値上げ、施設費2万円値上げの計4万円の値上げということで最終的には元通りになりました。「いったいあの騒動はなんだったのか」と多くの人が思うほどの事件として落ち着きましたけれども、それまでの過程で、非常に大きな痛手が西南にはありました。と言いますのは、この体育会系と全闘委の衝突という事件が起こったんです。全闘委というのは学生自治会の委員等を中心としたものですが、それらが「体育会系学生はなぜ学費値上げ反対を撤回したのか、我々は反対を貫こう」というようなことで対立が深まりました。そして、2月19日の夜、全闘委の学生たちが協議会の結論を不満として、院長や理事、部長などがいた学長室を封鎖し、軟禁状態にしたんです。ドージャー院長は心臓の問題があって、時間の経過とともに悪化していきました。医師を呼んで病院に連れて行こうとしても、缶詰めにした全闘委側が応じませんでした。そこまでエスカレートしてしまったんですね。そうすると、少し前に全闘委と衝突のあった体育会系の学生が、外側から入ろうとしました。「賛否両派が衝突—角材などで一人けが」とありますが⑦、これは学長室の外側です。体育会系の学生が、棒などを持って外から学長室の窓ガラスを破って入っていき、「お前たちはなんだ。先生方をこんなに長く閉じ込めて、そう

いうやり方で要求を貫く気か」というようなことで学生同士のいざこざが起こります。

結局、全闘委側はあまり抵抗せずに出て行って、院長もすぐ病院に行って事なきを得ましたけれども、この衝突で学長室はめちゃくちゃになったという大事件でした。私はちょうどその時、学生主任でその部屋に居合わせて、窓を破って入ってきた体育会の学生も覚えています。今でもその連中に会うとあの時のことを冗談交じりで話しますね。私は翌日も心配だったので学長室



⑦1968(S43).2.20 朝日新聞

に行って荒れた部屋を見ていましたら、後ろから中村保三事務局長が来て、「先生、西南が始まって以来の大惨事です。こんな事は一度もなかったのに…」と言って嘆かれました。全学ストのために期末試験が延びたというのも初めてです。とにかくこの時には西南創設以来初めてという大きな事件が2つも起こったんですね。私は、その時、破れた窓ガラスにかかっている薄いカーテンが、入ってくる風にゆらゆら翻るように揺れていたのを今でも覚えています。ただ、西南に来たばかりなので中村事務局長のように歴史を知りませんでしたが、これは大変な事になったと感じていました。

そういう紆余曲折を経まして、結局は大学側が押し切った形で当初の値上げを実施したのですが、大学紛争はいろんな意味で教訓を与えてくれたものと思っています。1つは一部の過激な学生に振り回されたことです。その学生たちは過激ではありますが、全体を代表してはいない。そこをやはり見定める必要があったのではないかと思います。それからもう1つは、やはり頭からダメだと否定したのはまずかったと思います。相手の立場も尊重し、話しは聞くけれどもこの点は譲れない、という大学としての姿勢を最初からきちんと持っていればよかつたんじゃないでしょうか。そういうことを通じて、この紛争を貴重な経験として今後生かしていくべきではないかと思っています。

その後の学生運動

それから次の写真を見ていただきたいと思います。これは紛争の原因が学費値上げではなくて、その後、1969年の沖縄返還や1970年の安保反対闘争など、主に政治的な事件ですが、それがあつた時に、我が西南学院大学の事務室などの施設が他大学の過激派に破壊されたという写真です⑧。西南の学生は3つの全国的な学生運動の派閥の中で一番過激な活動をする中核派が多くいました。しかも西南が九州の拠点校となっていました。同じ考えを持った他大学の学生たちが応援に駆けつけてきて、このようになら激しい運動を展開していったんです。私の見る限りでは、西南の学生は「ここまでめちゃくちゃにされるなんて考えてもみなかった」とい



⑧1969(S44). 4 .24
机などでバリケードを作る (総務課)

うことで、びっくりして恐怖さえおぼえ、震えていました。つまりこういう騒動を西南の学生が起すのか、自分の大学ではないからと無責任になる外部の学生が起すのかを見極めないといけない。見極めてもどうしようもないかもしれませんが、そういうことが経験的に分かりました。それからこれは、いよいよ機動隊を入れざるを得なくなった時の写真です⑨。これもおそらく西南始まって以来じゃないでしょうか。ここに、2号館前で学生と機動隊とがにらみ合っており、さらに次の写真は「過激派学生と教職員のやり取り」とあります⑩。これは1971年ですから、学費値上げ反対運動から3年過ぎていますが、ここに懐かしい顔があるからご紹介しておきましょう。ハンドマイクを持っているのが戸星先生ですね。学生主任だったんじゃないでしょうか。これが波田学生課長。これが山田さん。こういう非常時には上の指示があれば職員の人たちがすぐに飛び出してきた、命懸けで対応してくれたようなところ



⑨1971(S46).10.20 II号館前でにらみ合う学生と機動隊



⑩1971(S46).10.20 過激派学生と教職員のやり取り

がありました。本当に皆さんご苦勞様でした。そういうことで、懐かしい名前はぜひこの機会に出して、こういうこともあったということを記憶にとどめていただきたいと思います。

入試問題管理不適切事件

次に、思い出として私が経験したことは、入試に関する2つの事件に遭遇したことです。私が教務部長をしていました1977年の事件で、「西南大でも」入試問題漏えい事件がありました。この「でも」というのは当時、K大学、C大学など入試問題漏えいがあちこちで起こっていて、「西南大でも」と記事では書いたんでしょう①。疑惑の助教授が退職し、当の学生も退学届を出して受理されました。これはどういう事件かという、英語出題担当の助教授がアルバイトで予備校に教えていたが、その予備校の机の上に入試問題の原稿を置いていた。その管理が不十分だったために、受験生がそれを見て、事前に勉強して、答案を書いた、ということです。ところがこれが90点近い得点を取りまして、他の受験生の点数と比べると英語だけ突出していたわけです。これは少しおかしいんじゃないかと思い、その受験生が併願していましたので、それを調べたら、そこでも点数が良かったわけです。この時に私は教務部長の立場だったので、きちんと調べて、片を付けないといけないだろうと思いました。ということで、その学生本人をまず呼び、事情を聞きました。それだけでは言葉のやり取りにとどまるので、もう一度同じ試験問題をこの場で解いてほしいと言いましたところ、2度目の試験でありながらあまりいい点が取れていないんですね。そこで「これは少しおかしくない？」と言うと、少し緊張が取れてきたのでしょうか、「実は事前に試験問題を見て、それで勉強をしました。」と言いました。ただし、それは絶対的な証拠にはなりません。本人があとで「大学側に脅されて言った」となっているから、当の助教授の先生にも、「あなたの管理している入試問題が盗み見られたようですが、どう思いますか。」と追及すると、「あれは私の管理が悪くて見られたのかもわかりません。その不注意は認めます。しかし、見せたとか漏らしたことは絶対にはありません。」ということでした。それで、も



①1977(S52).11.15 西日本新聞
入試問題管理不適切事件

うこれ以上は追及できないと思いましたので、そこで調査を打ち切って、記者会見では「漏らした」のではなく「漏れた」のだと発表しました。ところが新聞を見ると「漏らした」と書いてあるんです。記者会見の時に、「決して漏らしたのではなくて管理不十分で漏れたのだから、その点は記事にする時にぜひ注意深くお願いしたい。」とあれだけ繰り返しましたけれども、新聞は「漏らす」になっていますね。やはり新聞は、読者の目や耳をそばだてた方がいいですから、いくら大学側が重ねて言っても、これは漏らした事件に間違いないと自分たちで判断すればこういう記事になります。一度新聞記者に「いったいあなた方は、我々がインタビューで言ったのと実際の記事が違うけれども、あれはどうか。」と聞いたところ、「いや、我々は原稿を書いてデスクに渡すだけです。あとデスクがどんな見出しをつけて、どう書くかはデスクの権限になっているので、我々としてはどうしようもありません。」と言うんですね。そうすると、もしそうであれば大学側として抗議すればいいと言うけれど、新聞というのはいくら抗議に行っても訂正はまず書きません。そういうことで、この先生には非常に気の毒な事をしましたが、いずれにしても管理不十分ということになりました。我々には、試験問題を作る先生は特別に気を付けているだろうという信頼関係があったわけです。それがこの件で崩れたということで、私は早速、問題作成にあたっては、ルールを作って管理を徹底するよう手を打ちました。

入試答案用紙消失事件

次に起こったのは入試答案用紙消失事件です。これは先ほどお話しました管理不適切事件に続いてその翌年に起きました。どうして私が教務部長の時だけこんな問題が起こるのかと、自分の身の不運を感じていましたけれども（笑い）。この時、入試で本部に詰めていた私は、4時10分前頃に今日も無事入試が終わったと思っていたところに電話が鳴って、試験場の担当者から、答案用紙が1枚足りないと聞かされました。そのときに背中に冷や汗が流れたことを覚えています。それで現場に飛んで行って答案の枚数を数えなおしたり、受験室を探したりしました。掃除の方がごみといっしょに捨てたのではないかと焼却場で処分するのをストップさせて徹底的に調べたんです。ところがないんですね。受験生50名くらいの小教室で監督者の教員1人と補助者が1人。しかも答案用紙を持って帰る監督者控室までは歩いて1分足らずで近いという状況でした。結論を言いますとこれはミステリーです。どこにいったか分からないまま今日に至っています。

ところが、どうして新聞記者が知ったかが問題なんです。つまり、前年の漏えい事

件の時に情報が広がりましたので、この問題がきちんとするまでは口外しないという形をとっていました。どうしてこの問題が漏れたか分からないけれども、新聞記者が教務部長室に取材にきたので、私は、今は調査中だから最終確認ができるまでは言えないと答えました。そしたらやはりその記者もつわもので「先生、今、私学も法律性や公共性を持った仕事ですよ。紛失したら紛失したで皆さんに知らせるのが筋じゃないですか。」と責めるようなことを言うんです。そこで、これは時間稼ぎをして、もう少し調べた結果を話さないといけなかったと思います。そうやって話が途絶えたところでふと思いつき、この事件をどうして知ったかと尋ねると、投書の葉書で分かったと言



⑩1978(S53). 2. 17 朝日新聞
入試答案用紙消失事件

うんです。そこで私はここぞとばかり「その葉書を見せてほしい」と言いましたら、「上司の許可がないと見せられない」とおよそ予想していた答えでした。そこで、電話を渡して「ここから電話して上司の許可を取ってもかまわない」と言ったら、新聞記者が「私、帰ります。」と帰ってしまいました。今考えると、どうもその時の記者は、1枚ではなくもっと多く紛失しているのではないかと思っていたようです。だからこれは大変だと思っていたのでしょうかけれども、こちらは投書を見ていないものですから、どんなふうを書いてあったか分からないんです。いずれにしても、この問題については、記者会見でそれなりの説明をして、正直に未だに分からないと言いました。ここに「なぜ」「ミステリー」という記事がありますが⑩、本当にミステリーです。

この問題の決着は、その受験生の他の科目の点数などを考慮した結果、合格としました。結局、十分合格するほど他の科目も良い成績だったのです。こういう問題の中で、私はまた1つの勉強をさせていただきましたが、今の時代で何事も隠し通せるものではないが、確実になるまではあまり何も言わない方がいいということです。というのは、一度新聞に出てしまうと、もう取り返しがつきません。ニュースがいろ

んなところから出ると良くないので、スポークスマンを通して、きちんとそれなりに対応するというのがいいようです。私にとっては非常に印象深い思い出となりました。

西南学院大学への想い

それでは西南に対して私はどう思っているか、ということですが、私の「西南の想い」は、紆余曲折あっても最終的には落ち着くべきところに結論がいくということです。教授会でもいろんな人がいますが、しかしそういう中で議論を尽くしていくというのは非常に健全だと思います。やはりそういう良心的なものが西南にはあるのではないかというように思っています。例として、学生処分問題を挙げます。これは学費値上げ闘争の時の処分問題で、学生はすぐ処分をしないでだろうと言っていましたが、大学側はそうはいかず、学生部長以下、学生部会議で集まって写真を見ながら、この人はここにいた、この人はこうだった、とかいちいち指しながら処分を考えていきました。キリスト教大学はこういう学生処分の問題について、どういう対応を取るかということに大変興味がありました。やはり他の大学と同じような処分をするのか、そうではなくてキリスト教精神に基づいて違う形をとるのか。それで学生部会議の原案は、大多数の学生が処分の対象になりまして、次にそれが連合教授会に諮られました。いろいろな意見が出て、夜の11時を過ぎて1時、2時まで議論が続きました。私は、やはり大学側も説明不足ということは認めているわけですから、何もかも学生に責任を負わせるのはどうだろうかと思いました。ただし、暴力を使ったケースや自治会の委員長や局長などの形式責任は、これだけの学内の混乱と施設破壊など引き起こしたのですから逃れられないだろうと思いました。そこで処分の対象を絞り、2人が退学で6人が諭旨退学、あと3人が停学という原案で議長に採決してもらったら、多くの人が手を挙げて賛成になりました。その時に私は、西南の皆さんは物が分かっているに本当にいい線で落ち着くというのが「西南学院大学への想い」の1つ目でした。

それから次は、2つ目は文科系総合大学ということです。これは古賀武夫学長が、1967年に法学部を開設したときに「西南学院大学は、法学部ができたことで文科系総合大学として形が整った」ということを言われました。西日本における総合大学として大枠を作った、それがずっと今まで来ているんです。そこで西南は、文科系総合大学というこの枠を守りながら進むのか、あるいはいつか枠を取るのかという選択の問題がいずれ来るだろうと思います。その時もC.K. ドージャー先生の「キリストに忠実になりなさい」という言葉ですが、いったい、キリストがいたらどう考えるのか、

というようなことを日頃から考えておけばいいのではないかと考えています。

それから3番目は、これはもう皆さんご存知だと思いますが、「西南は変えることのできるものと変えることができないものとを識別する知恵を持って、先取的な取り組みをしている」と思います。これはそこに4つの例を挙げていますが、図書館に国連寄託図書館、その後、EC情報センターが設置されました。これは全国で私立大学では初めての先見的なものだと思います。それから2番目に大型電子電算機の導入がありました。これも西南は早くから行いました。それから国際交流制度をいち早く西南は取り入れました。これが3番目。それから4番目は国際文化学科の設置をあげています。これは全国初ですが、この国際文化という言葉を使った大学は学生が来るというほど先取的なものでした。ところがこれらは、取り掛かりは早かったけれども、その後は他大学に追い抜かれている状況です。別に競争じゃないから、私は追い抜かれてもいいと思います。ただ、なぜそうなったかというのを考える必要はあるかもしれません。

そこで、これらについてそれぞれ、当時職員の方の中で、経験を持った方がおられますので、それを踏まえて、いろいろ話を聞かせてもらおうと思っています。

〈事務局職員を交えての座談会（省略）〉

今日、「西南学院大学の思い出と想い」ということで、親しみを込めて話をさせていただきましたけれども、今後とも100周年に向けて、いろいろな機会にこのような話をしながら、切磋琢磨していければと願っています。本日は、このような場を与えてくださりまして、ありがとうございました。

(2010年8月23日(月)：西南学院事務局職員夏期修養会・別府湾ロイヤルホテルにて)

【川上宏二郎先生は、2010年12月9日に急逝されました。そのため、本稿のテープ起こし、及び編集・校正は『西南学院史紀要』の担当者が行いました。川上先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。
(編集者)】